先駆 1974 年 12 月 20 日　第 3 種郵便認可
2021 年 2 月号
1 月 25 日発行（通巻 993 号）
毎月 1 回 25 日発行

月刊

先駆

2021 2月
993号

◆新コロナ法は欠陥法案―菅内閣は危機管理へゲモニーなし
◆「8050 問題」を考える―ひきこもりと家族の孤立
◆『先駆』1000 号記念―機関誌『構造改革』の時代

The Front-League for Socialism, Japan
フロント［社会主義同盟］

『先駆』1000号記念

機関誌『構造改革』の時代

安藤　紀典

今年9月に機関誌『先駆』は通巻1000号を迎える。フロントの前身、統一社会主義同盟結成から59年、激動の時代をくぐり抜けながら、政治、社会の変革に挑戦してきた。機関誌（紙）名もスタートの『構造改革』から『平和と社会主義』、そして『先駆』と変遷し、新聞形式から雑誌形式への移行など時代や環境の変化に対応しながら読者と共に歩んできた。その歩み自身が一つの歴史でもある。今号から9月まで、その歴史を振り返るシリーズをお届けする。

（編集部）

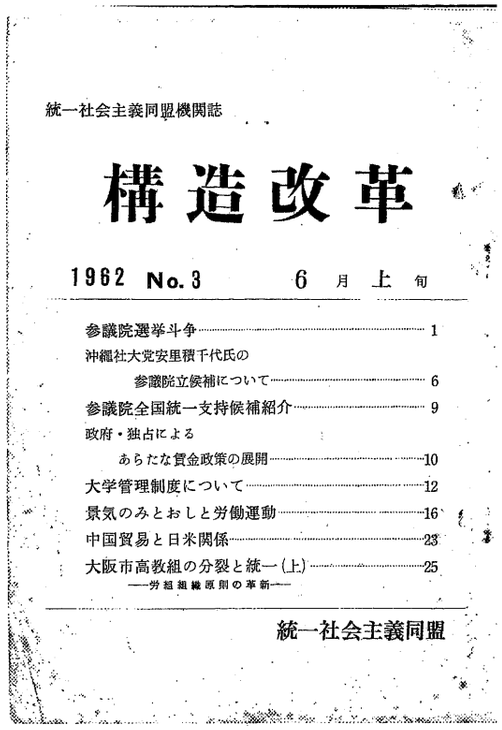
タイプ印刷で発刊

わが同盟の出発点は1962年の統一社会主義同盟の結成である。結成大会は5月2～3日に東京で開かれ、アピール「新しい民主主義・社会主義勢力の結集のために」、結成宣言「社会主義日本の実現をめざして」、統一社会主義同盟規約を採択した。結成宣言は後日、佐藤昇が手を入れて、単独のパンフレットにして発行した。

早くから結成を提唱して組織人員も多かった大阪に「全国本部」が置かれた（事務所は大阪市北区高垣町23番地）。指導機関として「全国委員会」が設けられたが、代表委員の山田六左衛門（元共産党大阪府委員長）と東谷敏雄（大教組委員長）、書記長の村田恭雄はすべて大阪の所属。

結成当初に同盟組織が確立された地方とその主なリーダー、拠点は次のとおり。北から順に、仙台（清水宏幸＝地元では著名な医師、逸見英夫、東北大学）、福島（高木松太郎＝全国委員、春日庄次郎の指導を受けた同志）、東京（春日庄次郎・安東仁兵衛＝ともに全国委員、理論家および単産の幹部多数、都教組、東大、早大）、新潟（江川弘＝全国委員、新潟大、新潟高教組）、富山（七々山政弘、日本海重工、富山大）、京都（飛鳥井雅道ほか、島津製作所、立命館大、京大）、大阪（松葉武雄＝二代書記長、大森誠人＝三代書記長ほか。地方組織としては最大で、大教組、大阪市職、松下電器ほか）、兵庫（直原弘道＝全国委員、神戸大）。全国の組織人員について正確な記録はないが、ある会議で採った私のメモによよそ600人とある。

組織内の「全国本部通信」（ガリ版刷、ろう原紙に鉄筆で文字を書き、インクを浸透させて印刷する）と、機関誌『構造改革』を発行した。奥付は編集兼発行人統一社会主義同盟となっているが、機関誌編集局は「東京都千代田区神田小川町2の12、新日本産業研究所内」となっており、東京で編集したことが分かる。第11号まで半月刊、B5判（現在の『先駆』と同型）のタイプ印刷、平均30ページ、定価は50円。第12号（11月）から月刊、タイプ・オフセット印刷で平均60ページ、定価は100円に変更された。発行部数は1000部でスタートし、第15号（63年3月）で1800部に増刷されたと報告されている。



統一社会主義同盟機関誌

構造改革

1962 No.3　6月上旬

参議院選挙斗争……1
沖縄社大党安里積千代氏の参議院立候補について……6
参議院全国統一支持候補紹介……9
政府・独占による あらたな賃金政策の展開……10
大学管理制度について……12
景気のみとおしと労働運動……16
中国貿易と日米関係……23
大阪市高教組の分裂と統一（上）……25
——労組組織原則の革新——

統一社会主義同盟

初期の誌面の特徴

この間の誌面で取り上げられたテーマは主に四つあったといえよう。一つは「総評大会にあたって」、「炭労政策転換闘争について」、「日教組大会を迎えて」など労働運動の現状についての評価と政策提言である。多くは「全国委員会」「同盟労働対策委員会」などの名で発表されたが、もちろん個人執筆のものもある。柳田竜夫（棚橋泰助、『戦後労働運動史』大月書店で知られた論客）のインタビュー「総評大会の検討」、「公務員共闘の賃金政策とその問題点」（鈴木美雅、大阪市職員組合）、「社会保障闘争の攻勢的方向へ」（田宮隆、全労済）などである。労働運動の同盟員は大阪をはじめ日教組がもっとも多かった。

二つは、ソ連核実験に対する態度をめぐって、原水禁運動が共産党系と総評・社会党系とに分裂しはじめ、また核戦争寸前と言われた「キューバ危機」の経験から、ソ連が63年1月を期して核実験停止を提案した時期で、新しい運動方向が求められていた。「米ソ核実験反対、核実験停止協定の即時締結、核戦争阻止、軍備全廃」が同盟の基本的立場で、ほとんど毎号このテーマを取りあげ、その主張は現実の大衆運動にそれなりの影響を与えることができた。全面軍縮をめざす科学者の「パグウォッシュ会議」（カナダ）の紹介記事、「モスクワ世界平和大会の特徴」（前野良、構造改革派の政治学者、社会主義政治経済研究所を主宰、ハンガリー事件や中ソ論争の国際文献を多数編集した）なども掲載された。

三つは、62年秋に提出された「大学管理法案」に対する批判である。大管法反対闘争は60年安保闘争以後しばらく停滞していた学生運動が盛り返すきっかけになった闘争として歴史に残るが、同盟の場合は、杉山忠（森田桐郎、共産党時代に京都の同盟の基礎を築いたリーダー）、行田良雄（神戸外大教員）、村田恭雄らが、「大学教育の革新」という側面からも論じたのが特徴であった。

四つは、中ソ論争に関する見解である。ことに第15号の半分はこれの関連論考で埋まっている。「中ソ論争の核心」沖浦和光、「中ソ論争と日本」大橋周治

（「中立日本の経済構造」を提唱した経済学者）、「キューバ危機と中ソ論争」上原道彦（全国金属関東支部）など。

複数前衛論を提唱

このころ同盟内で一番話題を呼んだのは「多数中心制と複数前衛論」（第12号）であった。同盟大阪本部の宿泊学習会において、安東仁兵衛の「報告」にもとづいて、大木理人（勝部元）・大森誠人・松葉武雄・村田恭雄・佐々木弘（本部の専従書記、ガリ版刷りの文字の美しさは名人級）ら8人が討論した記録であった。

「多数中心制」とは、国際共産主義運動に中心はない、各国の共産主義者が自国の革命に責任をもつべきだという、イタリア共産党書記長・トリアッティが提唱した考え方。「複数前衛論」とは、「前衛であったものが前衛でなくなり、またかつて前衛でなかったものが前衛たりうる、そういう前衛の機能指数とでもいおうか、それは可変指数であり、たえず現実との対応において決定される」ということで、「労働者階級の政党も必ずしも一つではない」というのが安東の主張の肝（きも）であった。

日本には社共に所属しないが社会主義をめざす無党派の活動家・集団が多数存在すること、また「社会主義日本」の実現のためには構造改革論を採用した社会党との協力関係が必須であるという認識が背景にあった。

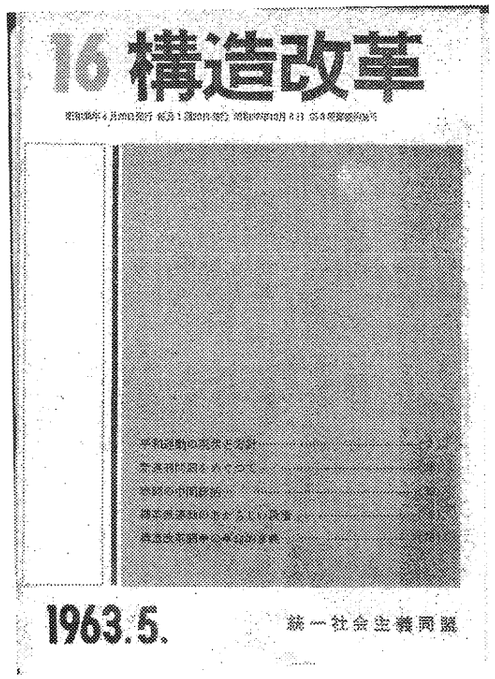
「報告」をめぐって賛否両論入り乱れての大討論となったが、当時の同盟の「前衛」観を知る上で重要な文献ではあった。

第16号から活版化

第16号（写真）から活版印刷に発展し、A5判（『現代の理論』と同型）、平均80ページで、定価は130円。これが第23号まで続いた。活版化によって収録できる原稿枚数も大幅に増え、かなり読み応えのある内容になった。発行部数は第16号で2000部と報告されている。

活版の各号の主な目次を列挙してみよう。すでに時効であろうから、ペンネームで発表したものは、私の記憶する限りで本名を明らかにする。

第16号（63年5月）「平和運動の現状と方針」全国委員会、「新週刊」問題（総評が発行した『新週刊』の破産をめぐって）＝庄野達夫（出版労協）・大野昭之（東京・文京教祖）・安東仁兵衛、「ゆがんだ青春」について（60年安保闘争時、全学連主流派が田中清玄から資金援助を受けたとTBSが放送した）＝安藤紀典（学生全国委員）・江川洋（大井武正、同盟東大支部）、シンポジウム「構革派運動の新しい段階」井汲卓一・池山重朗・佐藤昇・安東仁兵衛。



第17号（6月）「世界資本主義の現局面と軍縮の視角」吉田進（富塚文太郎、経済分析研究会）、「われわれの現状――大衆の中へ」睦田洋（飯尾要、桃山学院大教員）、「地方からの提案」江川弘、「創価学会の政治進出を衝く」田村宏（石田郁夫、ルポライター）、「軍縮問題とキリスト教」山口光朔（桃山学院大教員、寄稿）、「政治のリアリティと芸術のリアリティ」中島誠（文芸評論家）。

第18号（7月）「憲法、社会主義革命、社会党」編集部（討論にもとづき安東仁兵衛と田村宏がまとめた）、「憲法擁護運動の発展のために」第2回全国大会議案、「教育における構革闘争の発展によせて」前田穣（新潟高教組）、「職場闘争と構造改革路線」鈴木実（松下電器高槻支部書記長）、「原子力潜水艦寄港反対運動の発展」村上克彦（村上勝彦、東京都学生委員）、『『現代の理論』と『思想の科学』」飛鳥井雅道。

第19号（8月）「同盟活動の新しい段階へ――第2回全国大会討論を総括して」全国委員会。大会に提案された「最近の国際・国内情勢について」をめぐって異論が出されたので、本号から討論が組織された。少数意見の代表は春日庄次郎。「賃金闘争試論」同盟大阪市職支部、『『山陽新聞不買運動について』』草木富士雄（『岡山大衆新聞』編集長、寄稿）

第20号（9月）「三国核停協定と完全軍縮への前進」井汲卓一・池山重朗・安藤紀典、「部分核停協定と平和運動の再建」星川光義（都教祖八王子支部長）、「西ドイツの平和運動の現状」リザ・ニーダーバンクへのインタビュー（聞き手・松葉武雄）、「総評大会の検討」田村宏・柳田竜夫、「組織的検討と運動への定着が急務」吉田匡夫（炭労書記局、第2回全国大会議案「労働運動の総括」のうち、とくに炭労の政策転換闘争の項について「炭鉱労働者不在」であると批判した）。

第21号（10月）「原水禁運動の組織論をめぐって」大森誠人、「平和運動の新しい波」京大フロント（社会主義学生戦線）、「平和と社会主義についての断片」村田恭雄、「現代の青年は何を考えているか」（社青同大阪北支部執行委員）、「中ソ論争と中国マルクス主義」西川一郎・佐湖純一（中嶋嶺雄、中国研究者）。

第22号（11月）「中共理論の誤りを衝く」佐藤昇、「広島大会と中ソ論争」勝部元、「母親大会の『成功』に思う」楠奈美子（浜岡なぎ子）、「関西平和大会のまとめ」大森誠人、「日本の非核武装と完全軍縮のための関西大会」基調報告。

第23号（12月）は手元にない。この年の第4回全国委員会は機関誌活動について、次のように決定した。①旬刊、タブロイド4ページの政治新聞の創刊準備をすすめる。②機関紙編集責任は書記局がとり、編集責任者に直原弘道全国委員を決定する。③『構造改革』は月刊誌としては12月をもって終わり、季刊誌として継続する。

政治新聞創刊の背景には、第二次『現代の理論』が64年初頭に創刊される予定で（実際の創刊号は64年2月）、同盟員の出版関係者や理論家はそれに力を割かなければならなかったので、同盟の月刊誌発行は難しくなったという事情がある。政治新聞は『平和と社会主義』の名称で創刊され、季刊誌『構造改革』は発行されなかった。

江川弘論文の影響力

活版化したのちの『構造改革』で同盟の組織活動にもっとも大きな影響を与えたのは、第17号

に掲載された、江川弘の「地方からの提案」であった。これは同盟第2回全国大会を前にして、われわれの組織活動はどうあるべきかについて、新潟での実践をふまえて提案したもので、要旨を抜粋しておく。

「われわれが強調したいのは、同盟は『政策立案集団』としてではなく、（略）徹底的に運動形成者としての道に邁進すべきであったということである。この側面が非常に弱かった、ということである」

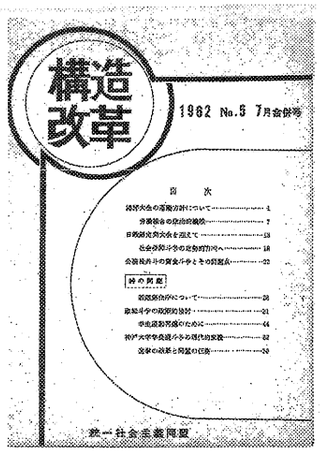
「われわれの前には、構改運動が成功するはずの客観的条件があまりにもありすぎた。数百万の無党派活動家（社共両党内の批判分子を含めて）の結集が、正しい政策提起を結合環として、急速に可能であるような錯覚におち入っていたのではなかろうか。だが、客観的条件による可能性を現実性に転化するためには、それをにない得るだけの主体形成が伴わなければならない」。「そしてその主体の形成は運動の展開なくしては不可能である。運動展開の規模によって主体形成が拡大され、主体形成の速度に応じて運動の発展が保証される」

新潟大学の生協設立運動や高教組内の最有力分会での活動をとおして、「戦術問題の重要性がわかってきた。大衆運動を組織するということは、大衆の中にある要求を引き出し（要求の自覚化）、目標を明確にし、それを達成するための運動に形態を与えるということである。戦術とはこの形態である」。「政策提起（目標の提起）だけでは運動は展開しない。大衆運動への現実的介入のためには、戦術問題を重視しなければならない」

「われわれはこの経験の中から多くのものを学んでいる。理論活動、政策提起ではなし得なかった活動家への思想浸透を初めてなし得た。そして何よりもわれわれの構改路線の正しさへの確信が深まっている。同盟の思想的均質化の過程が進んでいる」

「新しい前衛形成には種々のコース、種々な可能性が考えられる。複数前衛の問題もある。しかし、今必要なことは、あれこれの可能性を思索することではなく、戦闘的構改運動をにない得る部隊を大きくすることである」

全国大会での討論の基調は、事実上江川論文によって決定されたと言ってもよかった。



『先駆』1000号記念

2017年6月、統一社会主義同盟兵庫の創始者・指導者の一人、直原弘道氏を偲ぶ会が開かれ、同志、友人、知人らが駆けつけ、語らった。この「偲ぶ会によせて」は報告と問題提起を兼ねてフロント兵庫の内部文書としてまとめたもの。同盟の歴史を踏まえた提起となっているので、「先駆1000号記念」の一つとして公表する。

（編集部）

「直原弘道氏を偲ぶ会」によせて

いわゆる〝統社同圏の人々〟の歩み

―「兵庫〝統社同圏〟60年」と〝現代の構造改革〟（＝社会協同主義）―

フロント（社会主義同盟）兵庫

はじめに

①フロント（社会主義同盟）の前身である統社同（統一社会主義同盟）兵庫の創始者・指導者の一人であった直原弘道氏が今年4月16日亡くなり、6月4日「偲ぶ会」がおこなわれた。

②「偲ぶ会」には、直原氏と共に日本共産党―統社同の道を歩んだ同志・友人、そのあとの活動を担った同志・友人、幾多の変遷を経ながら、現在フロント（社会主義同盟）で活動している同志・友人、そして直原氏の活動に共感・共鳴している研究者等27人が参加した。年齢は80代後半から60代、40代であった。

③我々は「偲ぶ会」とは故人に何らかの影響を受けた人々が純粋に「故人を偲ぶ」という人の道（としての当然の行為）であると同時に、故人が今生きている参加者に対して「参加者の今日的問題意識」を―故人とのつながりを通して―語り、確認する場・機会を与えてくれたもの、と考えている。

④こんな訳で、参加者を貫く今日的問題意識を「いわゆる統社同圏の人々の歩み」として我々なりに問題提起してみたい。それは自ずと「私たちが歩んできた道」「私たちが歩もうとしている道」となる。もちろんそれは「我々なりのもの」であり、参加者だけでなく多くの関係者に多大な誤解を招くものになるかも知れないことを十二分に踏まえたうえでの問題提起である。参加者および関係者各位のご批判・ご批評を期待する。

1．統社同圏の人々を貫く三つの指標

①「統社同圏の人々を貫く3つの指標」とは、一つは先進国革命論（一般的に「構造改革」路線）および社会主義革新（一般的にスターリン主義批判・プロレタリア独裁批判）を通した共産党圏（＝日本共産党の価値体系）からの離脱→統社同圏（＝統社同の価値体系）の形成である。1960年代に該当する。

二つは統社同圏も巻き込んだ、反戦―全共闘運動に代表される、いわゆる68年革命（への対応）である。まさしく68年前後である。三つは「ソ連・東欧の現存した社会主義」―我々の言う〔社会体制〕主義―の崩壊」である。90年代初頭に該当する。

②これら三つの指標については、安藤紀典氏によってほぼその全体像が明らかにされている。では、我が兵庫の統社同圏の人々の間ではこの「三つの指標」をめぐって何が論争されどう展開されたのか――――を、誰が中心的役割を果たしたのか、という形を通して迫ってみたい。なぜなら、兵庫では「人によって大体が分かる」からである。

2．統社同圏を揺るがした68年革命

（1）68年革命の複雑な展開

①三つの指標をめぐって、兵庫の統社同圏の人々の動向を最も象徴しているのは、故中島秋生氏、故小山竹二氏の2人である。

今だから明かすが、中島さんは血液癌で亡くなるまで一貫して統社同→共革党（日本共産主義革命党）の現役党員であった。小山さんは68年革命をめぐる路線論争で離脱していたが、1980年頃共革党に再入党し、95年の阪神大震災を生き抜き、現役党員のまま亡くなった（統社同は1970年日本共産主義革命党に、1987年にフロント（社会主義同盟）に党名変更）。

②中島さん、小山さんは、三つの指標をめぐる節目節目で、直原氏、石井亮一氏（元兵教組委員長、元連合兵庫代表）、小寺山康雄氏（元統社同議長、元社会主義理論政策センター代表）等と袂を分かちながらも共革党に籍を置いた。かと言って多くの仲間と絶縁していたかと言えばその逆で、友好関係は一貫して維持していた。この2人の存在（生き方、あり方）そのものが統社同圏の人々という形容そのものでもある、と言えるのではないだろうか（こう言えば小山さんの「ちょっと待て」という声が聞こえて来そうではあるが）。

③68年革命は兵庫の統社同圏の人々をどのように揺るがしたか？　68年革命を便宜上「前半部分と後半部分」に分けてみたい。兵庫では「68年革命の後半部分」があまりにも悲惨だったため、今なお尾を引いており、当事者が多くを語らない、というより語れない、語りたくない、という状況が続いている。

④「傍目八目」というコトバがある。囲碁で第3者の方が状況がよく見える、という意味だが、兵庫の統社同圏の人々のなかで、中村登氏は反戦―全共闘運動が敗北した73年、新潟から流れてきた唯一の傍目である。中村氏には兵庫の「68年革命の複雑な展開」はどう映ったか、中村氏に語ってもらう形で迫ってみたい。

（2）68年革命の前半部分

①68年革命の最大にして最高の要素は「ベトナム反戦運動」である。全国的には「ベ平連」（ベトナムに平和を！市民連合）運動であるが、この原初形態が神戸の「ベトナムに平和を神戸行動委員会」の運動である。これを担ったのが故直原氏、故山崎洋祐氏、真砂卓三氏をはじめとする統社同圏の人々である。このことは日本共産党周辺を研究されている黒川伊織氏とその後のベ平連神戸を担った西信夫氏によって初めて明らかにされた。

②68年革命はやがて学生運動に波及した。既存の価値観を代表する学生自治会を乗り越えるエネルギーが「全共闘」（全学共闘会議）を生み出した。兵庫でも神戸大、神戸外大、関学大をはじめ全大学で全共闘が結成された。神戸大では神大全共闘が統社同の学生組織であるフロント（社会主義学生戦線：SSF）の指導下で結成された（議長は平松泰典氏）。労働運動でも同じであった。既存の価値観を代表する労働組合を乗り越えるように職場に「反戦青年委員会」が結成されていった。ここで兵庫の〝統社同圏の人々〟の最初の分裂が起こる。日本共産党の影響を色濃く残していた直原氏、石井氏等は「全共闘はやり過ぎだ」として反対し、小寺山氏等は「認めるべきだ」として支持した。統社同も分裂し、小寺山氏が全国議長となった。

（3）68年革命の後半部分

①日本の68年革命（の後半部分）は、ヨーロッパの68年革命（の後半部分）とは全く様相を異にした。中国文化大革命の影響もあり、「既存の価値観打破」→「造反有理」→「ブルジョア民主主義打破」→「暴力革命」という、いわゆる「レーニン主義への回帰」「党派への収斂」の道を歩み始めた。なぜ日本の68年革命はこのような道を進んだのか？　いまだに明確に総括されているとは言えない。

②統社同は、「蜂起―ソビエト―プロ独」を掲げ、先進国革命論としての「構造改革」路線を放棄し、「レーニン主義への回帰」を主張する高田麦等（『若きジャコバン』誌に結集したことから「若ジャコ派」と呼ばれた）が小寺山議長を解任・除名し、主導権を確立、党名も日本共産主義革命党（共革党）と変えた。学生組織もフロント（社会主義学生戦線：SSF）からL青同（レーニン主義青年同盟）へと変えた。また、大衆組織として反帝学戦（反帝国主義学生戦線）反帝高戦（反帝国主義高校生戦線）を組織した（総称して「フロント」「フロント派」を自認した）。現象的には「フロントの左傾化」であり、本質的には「フロントのレーニン主義化」である。小寺山氏も「統労同」（「統一労働者同盟」）の結成に進んだ。

③兵庫統社同は、この同盟内論争（―路線転換）にどのような態度をとり、どのように推移したか？　常識的には「激しい論争が起きた」「学生部分は高田を支持し、労働者部分・知識人部分は小寺山氏を支持した」等々と思われがちだが、兵庫統社同は違った。兵庫統社同はこの同盟内論争（―路線転換）を実質上ブロックし、一種の「中立的立場」を採り続けた。高田を支持し共革党に移行したのは糸魚川至郎氏（神戸大）、岸田政肇氏（神戸大）、福田誠一氏（兵庫県職）等ほんの少数であった。

④共革党は70年安保闘争、72年沖縄併合反対闘争等を全力で闘ったが、反戦―全共闘運動の敗北・混乱のなかで、中央指導部は自己崩壊し、全国的に大混乱に陥った。

共革党は72年夏、全国協議会を開催し、朝日健太郎氏等の臨時指導部を選出、再建への道を踏み出した。ここでも「再建派―解党派」に分裂した。圧倒的少数の兵庫共革党も「再建派―解党派」に分裂した。

⑤翻って、当時の兵庫統社同の態度をどう評価すべきか？　そ

の後の共革党を見ると『無益な論争』『組織的混乱』から仲間を守った」ということもできるが、それよりも重要なのは「中立的立場」ないしは態度保留組の多くは結果として68年革命の精神に触れることはなかった、68年革命の洗礼を受けることはなかった、ということである。ただ、兵庫では障害者解放運動等68年革命の精神は確実に生きており、おそらく西氏等をはじめとするフロント周辺で生き続けてきたと思われる。実に複雑な心境である。

（4）「創り出すエネルギー」と「整列するエネルギー」の交錯
―68年革命の総括への挑戦―

①日本の68年革命（の後半部分）は、なぜ「レーニン主義への回帰」「党派への収斂」の道に進んだのか？なぜ「フロントの左傾化」「フロントのレーニン主義化」は起きたのか？　これを『創り出すエネルギー』と『整列するエネルギー』の交錯」という観点から迫ってみたい。結論的に言えば「創り出すエネルギー」の「整列するエネルギー」への屈服、である。

②従来の反戦平和を超えるベトナム反戦運動に端を発した日本の68年革命は―「レーニン主義への回帰」「党派への収斂」を除けば―「創り出すエネルギー」に満ち溢れていた。学生運動では既存の価値観を代表する学生自治会を乗り越えるエネルギーが「全共闘」（全学共闘会議）を生み出し、労働運動では既存の価値観を代表する労働組合を乗り越えるように職場に「反戦青年委員会」を生み出した。「封建遺制としての未解放部落」を超える部落解放運動、「婦人問題」を超える女性解放運動、「奉仕・隔離」を超える障害者解放運動、華青闘の告発に端を発した「抑圧民族としての自覚」＝日中、日韓連帯運動、沖青同決起からの「沖縄を返せ」を超える沖縄併合反対・沖縄連帯運動、「先住民族としてのアイヌ民族」連帯運動、三里塚農民に連帯する三里塚闘争、「原子力の平和利用」に反対する反原発闘争点…。今日の様々な運動は68年革命の苦闘から生まれ出た、と言っても決して過言ではない。

③他方、社会変革は政治革命によってしか成し遂げられない、という「政治革命第一義主義」の変革論に立つ者・党派・潮流は―暴力革命であれ議会革命であれ―「政治革命に向かう『整列するエネルギー』」の絶対的信奉者である。この変革論は「社会主義」―我々の言う「社会体制」主義―と深く結びついており、「一連の価値体系」をなしていた。だからこの「一連の価値体系」が崩壊しない限り「創り出すエネルギー」が「整列するエネルギー」を凌駕しながら超えていくことなどありえなかった。これも90年代初頭にソ連・東欧の「現存した社会主義」が崩壊した今だから言えることではあるが……。逆説的ではあるが「ヨーロッパの68年革命が『現存した社会主義』の崩壊を準備した」と言えるのではないだろうか。

④「『整列するエネルギー』の所有者」であった日本共産党は、反戦―全共闘運動だけでなく68年革命そのものを『整列するエネルギー』の破壊者」とみなし敵対した。また革共同3派、ブント、中国派等も「整列するエネルギー」のもう一方の絶対的信奉者であり、68年革命の「創り出すエネルギー」を共有することによって『整列するエネルギー』の所有者」たらんとしたのである。こうして日本の68年革命（の後半部分）は「レーニン主義への回帰」「党派への収斂」の道に突き進んでいったのである。

⑤統社同はどうだったか？　社会主義革新に象徴される、統社同結成の精神からすれば「創り出すエネルギー」を内包する党派であり、68年革命の「創り出すエネルギー」と深く結びつく可能性を持っていた。しかし統社同も「創り出すエネルギー」と「整列するエネルギー」の交錯に投げ込まれた。直原氏等統社同創立以来の指導者は、「創り出すエネルギー」に共鳴し「反戦―全共闘を支持する」小寺山氏等に取って代わられた。その小寺山氏等は、「政治革命に向かう『整列するエネルギー』」に回帰し、これを暴力革命に直結させようとした高田麦等に取って代わられた。こうしてフロントは「8派共闘」の一角を占めるようになった。「1周遅れのトップランナー」と言われる所以である。当時の統社同圏の人々にとっては「事態の本質」が掴めないうちの出来事であり、中立的立場を採ったり嫌気がさした人も数多くいたと思われる。

⑥高田等は「共革党には未来がない」と一方的に宣言し逃亡した。共革党の自己崩壊は必然であった。連合赤軍の自己崩壊も基本的には同じである。「創り出すエネルギー」に依拠して成立しながら、党組織・党員には暴力革命に向かう「整列するエネルギー」を強要する。内部矛盾はどんどん蓄積していく。内部矛盾は状況が高揚していると隠されているが状況が変わると一挙に噴出する。指導部は「状況の高揚」を演出し「整列するエネルギー」をさらに強要する……。高田等の一部は「整列するエネルギー」を完璧に制御する共産党に「復党願」（？）を出す有り様であった。

⑦「創り出すエネルギー」が「整列するエネルギー」を突破し「レーニン主義への回帰」「党派への収斂」の方向ではなく「自己変革する社会―政治関係」を創出する方向に進んでいたら……。いずれにせよ日本の68年革命は多くの財産を残しながら敗北したのである。

3．「社会を創る」闘いと現代の構造改革（＝社会協同主義）

（1）いわゆる統社同圏の人々を貫くもの

①かつて高田は「整列するエネルギー」に違和感を持つ者を「統社同的体質を持っている」と批判した。また、フロントのメンバーは『整列するエネルギー』を強要しないフロント」を「居心地がいい組織」と言い、他党派は「何で結集しているのかわからない」「それで党派と言えるのか」と批判する。

②我々は「フロントは『整列するエネルギー』ではなく『創り出すエネルギー』で結集している」ことに自信を持っている。

冒頭に中島さんと小山さんに触れた。中島さんは、日本エアブレーキ労組委員長として朝鮮戦争に反対し、日本エアブレーキ（株）をクビになった。灘区の都賀川沿いですし屋をやって神戸大の学生を養いながら、共産党から市会議員に立候補―落選、パチンコ屋勤めを経て神戸市の外郭団体である神戸市都市整備公社に駐車場のキップもぎり（＝管理員）として勤務。そこで「赤いチャンチャンコは欲しくない」と高齢者ばかりの職場で労働組合・整公労（神戸市都市整備公社現業員労働組合）を組織、他の外郭団体にも働き

かけ労働組合を次々に結成していった。今で言う「公共民間」である。組合交渉術に長け、人間的魅力にも溢れ、管理職にも「外郭団体に中島あり」と言われた人物であった。

③小山さんは、戦前は川崎造船（今の川崎重工業）で働いた後、外国航路にコック見習いで乗船。戦後はそこで習い覚えた腕で灘区に「千疋屋」という大衆洋食屋を出した。中島さん以上に神戸大の学生を養った。その傍ら、神戸市土木局を相手に「雨の日はカラー舗装は危ない」と住民裁判を起こし、見事に勝った。おかげで今はすべての歩道でカラー舗装はなくなり、何らかの滑り止め舗装になっている。また、81年の湾岸戦争時には「自衛隊の海外派兵は絶対に許したらアカン」と反対運動の先頭に立った。2人は決して好々爺だったのではない。常に「行動する人」「社会を創り変える人」であり、「整列するエネルギー」より「創り出すエネルギー」にこだわり続けた人であった。

（2）社会主義の「二つの系譜」―〔社会〕主義と〔社会体制〕主義―

①資本主義が飽和状態に達し喘いでいる。それでも資本主義は（i）「見えざる神の手が救う」とする自由主義、（ii）「何らかの政治的手助けが必要だ」とするケインズ主義、（iii）「国民経済を越えたグローバルな見えざる神の手が救う」とする新自由主義、によって、必死に生き延びている。

②資本主義を葬るには（i）棺と（ii）墓堀人が必要だ。マルクス主義的には次のように言うことができる。棺とは（対抗）社会ないしは（次の）社会であり、墓堀人とは労働者階級である、と（もっとも統社同圏では「社会自身が墓堀人である」という主張もある）。

③レーニン主義では、まず墓堀人が資本主義を縛りつけ（＝政治革命）、それから相当長期に亘って棺を準備し（＝社会革命）、国家もろとも棺に納める（「国家の死滅」ないしは「国家の社会への埋め込み」）。この段階が『「共産主義の第一段階」としての社会主義』とされる。

レーニン主義における「棺の準備」（＝社会革命）とは「プロレタリア独裁」であり「国家と癒着した一種の社会体制」である。「社会」の上に「社会体制」が造られ、「社会」は「社会体制」に封じ込められる。市民（＝労働者階級）も「社会体制」に封じ込められる。〔社会〕主義（と思っていた社会）が〔社会体制〕主義に変質・転化・成長していく……。〔社会体制〕主義、これが社会主義の「一つの系譜」である。

④「もう一つの系譜」は、墓堀人が相当長期に亘って棺を作り（＝社会革命の先行）、ある段階で棺に入れて葬る（＝政治革命）、というものである。改良主義、フェビアン派等と近似で、「主体的改良主義」とでもいうべきものだが、決定的に重要なことは、「社会」自身が「社会の主人公」であること、絶対に「社会」の上「社会体制」を造らないこと、である。まさしく〔社会〕主義であり、これが社会主義の「もう一つの系譜」である。

⑤統社同圏は「〔社会〕主義の系譜」にあり、共産党ないしは革共同等の「〔社会体制〕主義の系譜」とは絶対に相いれない。そして「構造改革」路線は、「〔社会〕主義の系譜」での革命路線だったのである。

（3）「社会を創る」闘いと現代の構造改革（＝社会協同主義）

①今、日本社会は高度経済成長を成し遂げ、擬似的成熟社会、飽和社会に突入し曲り角に直面している。安倍は新保守主義を掲げ曲り角を突破しようとしている。安倍政権は歴代自民党政権とは異なり、憲法改「正」を実現する右翼革命政権である。

②〔社会体制〕主義から一歩も抜け出せない共産党が「反ファッショ人民戦線」路線を掲げ民衆の不安・不平・不満の中心にいる。これで展望があるのか？　他に道はないのか？

③確かに統社同圏そして「構造改革」路線は68年革命のなかに埋没した。「創り出すエネルギー」を社会変革に結合できなかった。今、「社会を創る」闘いを積み重ね、安倍と真に対決する陣形を創り出すこと、これこそが現代の構造改革（＝社会協同主義）であり、今こそ統社同圏の人々の底力を示さなければならない。

おわりに

①「直原弘道氏を偲ぶ会」によせて、という形をとって「兵庫統社同圏60年」に一石を投じたつもりである。最初はサブタイトルを「フロント（社会主義同盟）兵庫60年」とするつもりであったが、これでは統社同圏の人々が語れないことが明白になった。

②とりわけ、68年革命の「フロントの左傾化」「フロントのレーニン主義化」のなかで、多くの同志、友人が離反している。68年革命を利用しようとした者・党派・潮流がいたことは事実であるが、だからと言って「日本の歴史における68年革命の意義」を消すことはできない。兵庫における「複雑な展開」に敢えて踏み込んだ。

③『「社会を創る」闘いと現代の構造改革（＝社会協同主義）』は、正直言って「この辺が答ではないか？」という確信があるだけである。

④今70～80代の「68年革命の戦士」が安倍の新保守主義との闘いの先頭に立っている。我々も統社同圏の人々として現代の構造改革（＝社会協同主義）で共に闘うことを誓います。

（2017年6月30日）

新春対談
日本の革新運動
'64への抱負と批判
質量ともに飛躍の年
総動員令をひとつかけては
山田六左衛門
直原弘道

「平和と社会主義」創刊号（1964/1/10）